

3週間の研究室配属を経て、今まで知らなかったことを多く学びました。また、実験の基本的な手技を身につけることができました。

研究配属前、私は研究とはどういうものかを具体的に知らず、特に興味もわかず、手技的な不安が特にありました。2年時の生化学実習で初めて研究の基礎を体験したのですが、自分で操作を行う機会が少なく、また、操作の目的や意味を理解していないまま実習に参加していたので、苦手意識を持っていました。「責任を持って指導しますので、真面目な態度で望んでください。手先の器用不器用は、一切問いません。失敗は大いに結構です。」そんな言葉に惹かれ、また、AMについての桑迫先生の講義を既に受けており、全く知らないものが研究の対象ではないという安心感があったので、私はこの研究室に配属希望を出しました。

実習では、実験のプロトコールだけではなく、何の目的でその薬剤を加えるのかなど、一つ一つの操作の意味を講義していただき、理解した上で実験に臨むことができ、また、手技的な注意点もその都度教えていただきながら実験を進めることができたので、安心感があり、また自分でも考えながら操作を行うことができたので、苦手意識を克服することができました。全体の雰囲気としては桑迫先生のユーモアに支えられ、失敗しても強く責められるわけではなく、失敗した理由と対策を考えることができ、落ち着いた雰囲気の中で班員の仲を深めつつ楽しく実習をすることができました。実験に関しては、何を調べたいのかという目的に対して、一つ一つ驚くような発想によって作られた方法があり、プロトコールの意味を知っていくのがとても面白かったです。実験のデザインは自分自身ではしなかったのですが、桑迫先生が行っているのを見せていただき、どのwellに何を加えたら、どんな情報を引き出せるのかを考えながら行っており、今までは決まりきった実験を決められた通りにしか行ったことがなかったので、主体的に組み立てていけるという実験の新しい側面を知ることができ、研究に興味を持つことができました。論文の抄読会では、論文の構成からデータの読み取り方について学ぶことができ、データからは論文の作者が理論を進めるために利用する情報のみでなく、それ以外の情報も多く含まれていることを知り、論文を読むことは、論文作成者の論理を追うだけではなく、自らも主体的に情報を吟味し、評価することが大切であるということを知りました。

このような機会を提供して下さった加藤先生、お忙しい中、時間を割いて熱心に指導して下さった桑迫先生、貴重な経験になりました。3週間、ありがとうございました。